

第2回

アフリカ・米・日アフリカニスト会議

林 晃 史

昨年12月18日から20日までの3日間、「アフリカ学術支援のためのアフリカ・アメリカ・日本アフリカニスト会議」が東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所および慶応義塾大学で開かれた。本会議は一昨年9月に、カリフォルニア大学ロサンゼルス校アフリカ研究センターで開かれた第1回日米アフリカニスト会議(主催者代表ボズナンスキー教授、なおこの会議の趣旨と経緯については本誌 16号〔1993年3月〕の吉田昌夫報告を参照されたい)に次ぐ第2回目の会議であり、日米アフリカニストに加えて、アフリカ人研究者を招請し、かつ規模も大幅に拡大されたものとなった。以下、会議の研究面を中心に報告する。

会議の準備

第1回日米アフリカニスト会議およびその後シアトルで開かれた全米アフリカ学会年次学術大会(1992年11月)に出席した日本の数名のアフリカニストが第2回会議を日本で開催することを約束した。これに基づき、92年3月、京都で会議準備委員会が結成された。主催者代表を日野舜也(東京外国語大学)と決め、その他の準備委員として、小田英郎(慶応大学)、田中二郎(京都大学)、林晃史(アジア経済研究所)、森淳(大阪芸術大学)、吉田昌夫(中

部大学)が加わり、直ちに会議開催のための資金を国際交流基金の中に別枠で設けられた日米センターの助成金に申請書を提出した。

しかし、その後、国際交流基金の助成金許可が遅れ、実際に交付が決まったのは9月に入ってからであり、また総額も約半分に減らされた。会議開催は12月、会場は各分科会および全体会議を東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、公開講演会を慶応大学に決定した。

会議参加者とプログラム

参加者は以下のような合計46名となった。

第1分科会「アフリカ史研究・教育とアフリカをとりまく政治経済」(吉田昌夫座長)

Senteza KAJUBI (Vice Chancellor, Makerere Univ. UGANDA), Isaria KIMAMBO (Univ. of Dar es Salaam, TANZANIA), Samuel NDOUMBE-MANGA (Ministère des Affaires Sociales et Condition Féminine, CAMEROUN), David P.B. MASSAMBA (Univ. of Dar es Salaam, TANZANIA), George BROOKS (Indiana Univ.), Gwendolyn MIKELL (Georgetown Univ.), Merrick POSNANSKY (James S. Coleman African Center, UCLA), George YU

(Univ. of Illinois), John PHILIPS (秋田経済法科大学), 青木一能(日本大学), 犬飼一郎(国際大学), 小田英郎(慶応大学), 北川勝彦(四国学院大学), 富永智津子(宮城学院女子大学), 永原陽子(千葉大学), 林晃史(アジア経済研究所), 松田素二(京都大学)

第2分科会「アフリカの伝統工芸技術とその復権」(森淳座長)

J.K.AMOAH (Univ. of Science and Technology, GHANA), Allen ROBERTS (Univ. of Iowa), 井関和代(大阪芸術大学), 江口一久(国立民族学博物館), 梶茂樹(東京外国語大学), 日野舜也(東京外国語大学), 真島一郎(東京外国語大学), 和崎春日(日本女子大学)

第3分科会「アフリカの環境保全と地域社会との関係」(田中二郎座長)

Jean-Marie MOUTSANBOTE (Centre d'Etude sur les Ressources Végétales du Développement Scientifique et Technologique, CONGO), Nicholas TOTH (Indiana Univ.), David S. SPRAGUE (京都大学), 市川光雄(京都大学), 太田至(京都大学), 掛谷誠(京都大学), 佐藤俊(筑波大学), 菅原和孝(京都大学), 杉山祐子(弘前大学), 諏訪兼位(日本福祉大学, 日本アフリカ学会会長), 寺島秀明(神戸学院大学), 堀信行(東京都立大学)

その他, オブザーバーとしてJean Leopord DIOUF (国立民族学博物館客員研究員), Sammuell Buffuor OFOSU (アジア経済研究所客員研究員), Ayodeji Oladimeji OLUKOJU (アジア経済研究所客員研究員), Gordon C. MWANGI (四国学院大学), 岡倉登志(大東文化大学), 森川純(明治大学)らが参加した。

会議第1日午前は, 日野舜也の司会の下に初参加の人々のために, 基調報告としてポズナンスキーが第1回日米アフリカニスト会議開催からのこの会議開催までの経緯について, 吉田昌夫がこの

会議の目的についてそれぞれ報告し, その後, 参加者全員の自己紹介が行なわれた。ついで, 午後には3分科会に分かれて報告・討論が行なわれた。

第2日は午後から各分科会の個別報告・討論が行なわれた。

第3日は午前10時から昼食をはさみ, 午後3時半まで日野舜也の司会の下に全体会議が開かれ, 各分科会の成果について各座長の報告とアフリカ人参加者からの補足説明, 会議に対する感想が述べられ, 最後にポズナンスキー, 吉田両氏から第3回会議を2年後の1995年9月にガーナ大学で開くことを予定しているとの報告が行なわれ, 全員拍手のうちに了承した。引き続き夜6時から会場を慶応大学三田西校舎513教室に移し, 日本アフリカ学会関東支部との共催で公開講演会が行なわれた。講演はG・マイケル教授の「今日の世界情勢の中におけるアフリカのフェミニズム」とI・N・キマンボ教授の「アフリカの歴史: その挑戦と機会」で, 生憎の雨にもかかわらず100名近くの聴衆がためかけ熱心に耳を傾けた。

第1分科会の模様

前述のように会議は分科会方式で進められたので, 以下では筆者の出席した第1分科会の模様を中心に報告する。

第1分科会のテーマは「アフリカ史研究・教育とアフリカをとりまく政治経済」であった。日本におけるアフリカ史研究・教育の貧弱なこと, アフリカにおけるアフリカ人自身による歴史研究の進展にもかかわらず経済的理由からその成果の出版, 普及が困難であること, アメリカでは人口の12%に当たるアフロ・アメリカンの存在によって, アフリカ史の世界史の中で位置づけの議論が盛んであること, このような状況を踏まえて, 日・米・

アフリカの専門家が研究成果を発表しあうことにより、アフリカへの学術援助の具体化およびアフリカ史の見直しが行なえるのではないかということがこの分科会に期待された。報告は(1)アフリカ史研究、(2)アフリカ史教育、(3)教育における使用言語、(4)女性(Gender)問題にわけて、八つの報告が行なわれた。

I・キマンボ教授は「アフリカの歴史：その挑戦と機会」で、アフリカの経済危機下でのアフリカ人によるアフリカ史研究の危機(出版不能、雑誌購読費用の枯渇など)を訴え、その救済策として、Institution-building(研究環境整備)とコミュニケーションの重要性を指摘した。

永原報告「独立ナミビアの歴史教育」は1990年に独立したナミビアが「国民和解」政策の下にナミビア史を歴史教育の中でどうあつかっているかを問題とし、その際、民族解放闘争と、それとは逆にアフリカーナー支配をそれぞれ正当化する二つの大きな流れがあること、その選択は自由であるが今後の国民形成に与える影響の大きいことを指摘した。

G・ブルックス教授は「過去2000年間の西アフリカにおける気候、エコロジー、貿易」で、気象学の研究成果を取り入れ過去2000年間の西アフリカの商業貿易、王国の興亡は同地域の雨量の変化と密接に関連しているという新たな西アフリカ史解釈を提示した。

北川報告「両大戦間の日本・東アフリカ貿易」は数年来、同氏が資料として注目してきた領事館報告を基に日本・東アフリカの関係を明らかにし、アフリカ史への日本側からの貢献の一例を示した。

S・カジュビ教授は「東アフリカの教育発展——ウガンダを中心にして——」で、ウガンダにおける教育発展(伝統教育から宣教師教育さらには独立後の

国家教育)を跡づけ、特に独立後生徒数は増加し続けているのに対し、経済危機から予算が据え置かれていることを指摘し、また伝統的なものの教育内容への取り入れの必要性を強調した。

D・マサンバ報告「教育・調査における言語の役割」はタンザニアの教育と言語の問題を取り上げ、スワヒリ語が公用語であるにもかかわらず、高等教育では英語が使われていること、また、インタビューにおける使用言語、資料における言語解釈の難しさを指摘した。

G・マイケル教授は「アフリカのフェミニズム再考：農村と国家開発における新しい役割」で、フェミニズムをアメリカ人が男女の個人的関係から問題化するのに対し、アフリカ人は生活(社会)問題を基盤としていること、このためアフリカ人はまず政治・経済問題の解決に向かうことをガーナとケニアの事例から明らかにした。

S・ドベ・マンガはカメルーンの農村開発、特に森林開発における女性の役割の重要性にもかかわらず、女性の意見が軽視されていることを指摘し、氏の勤務する女性省でその解消に努力していることを報告した。

分科会の報告は以上であるが、第1回会議に比べ分科会方式を採ったため、出席者の専攻分野も近づき、かつ時間も十分あったので議論は活発に行なわれた。さらに今回はアフリカ人研究者が参加したことにより、アフリカの抱える問題がアフリカ人自身から提示されより説得的なものとなった。2回の会議に出席して痛感したことは、日本におけるアフリカ研究も常に外に向かって開かれていなければならないということ、そのためにはこのような会議を通じて意見の交換を図ることが重要であるということであった。

(はやし・こうじ/地域研究部研究主幹)